

令和2年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	京都芸術大学舞台芸術研究センター	
施 設 名	京都芸術劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内 定 額 (総 額)	11,120	(千円)
	公演事業	11,120 (千円)
	人材養成事業	0 (千円)
	普及啓発事業	0 (千円)

(1) 令和2年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	川村毅作・演出『4』※	2020年6月13日(土)・ 14日(日)	新型コロナウイルス感染症の影響により、両日とも中止。	目標値	310
		京都芸術劇場 春秋座 特 設客席		実績値	—
2	「京舞と狂言」※	2020年7月19日(日)	新型コロナウイルス感染症の影響により中止。	目標値	450
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	—
3	マームとジプシー 『cocoon』※	2020年8月22日(土)・23 日(日)	新型コロナウイルス感染症の影響により、両日とも中止。	目標値	400
		京都芸術劇場 春秋座 特 設客席		実績値	—
4	KYOTO EXPERIMENT 2020 京都国際舞台芸術祭ダ ナ・ミッチェル 『CUTLASS SPRING』※	2020年10月10日(土)・ 11日(日)	新型コロナウイルス感染症の影響により、両日とも中止。	目標値	280
		京都芸術劇場 春秋座 特設客席		実績値	—
5	「琉球舞踊と組踊 春 秋座特別公演」	2020年11月29日(日)	第一部 舞踊「本花風」「戻り駕籠」他 第二部 組踊「二童敵討」 出演：宮城能鳳、西江喜春 他	目標値	550
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	366
6	「春秋座 能と狂言」	2021年2月6日(土)	能「砧」、狂言「舟渡聲」 出演：観世鍊之丞、野村万作、野村裕基 他	目標値	530
		京都芸術劇場 春秋座		実績値	212
7	伊藤キム ソロダンス 『病める舞姫』	2021年3月27日(土)、 28日(日)	原作：土方巽 構成・演出・振付・出演： 伊藤キム	目標値	200
		京都芸術劇場 studio21		実績値	106

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの。

(2) 令和2年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの。

(3) 令和2年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの。

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>本年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延のため、令和2年2月末から同年8月末までの機能強化推進事業（No. 1, 2, 3）を含む本研究センターの自主公演事業がすべて中止となり、令和2年10月の海外からの招聘アーティストによる公演（公演事業 No. 4）も形態と時期を変更して行われたが、それ以外の機能強化事業は感染症対策を徹底した上で、当初の予定どおり実施した。</p>
<p>【本劇場のミッション、地域の特性について】</p>
<p>本劇場は京都芸術大学が所有する【大学の劇場】で、開場以来、「芸術立国」「京都文芸復興」という建学の精神に立脚し、大学と同様に、①教育（大学と連携した実践的人材育成）、②研究（芸術大学にふさわしい舞台芸術の創造と研究）、③社会貢献（舞台芸術を通じての地域文化の活性化）という3つの使命のもとに運営されている。その管理・運営は学内附置研究機関である舞台芸術研究センターが担っているが、本年度はコロナ禍という予想外の事態によって、中止もしくは延期を余儀なくされた公演は少なくなかったものの、機能強化推進事業については専門的なスキルをもつ本センタースタッフによって、【大学の劇場】にふさわしい質の高い舞台芸術作品の創造・上演を行うことができた。また、本劇場は京都あるいは関西地域の中核劇場として、「京都から世界へ」「世界を京都へ」を標榜しているが、その方面の事業と位置づけていた公演事業4（京都国際舞台芸術祭 Kyoto Experiment との共催）も、後述のように時期と形態を変更して実施できた。</p>
<p>【ミッションにもとづいた事業の組み立てについて】</p>
<p>本年度の事業は、上記ミッションのもと、従来通り、舞台芸術学科・大学院教員および学外の演出家、舞踊家、地域の民間劇場の芸術監督、国内外のアーティストの支援団体役員等の多様な分野の識者で構成される運営会議の議を経て実施された。本年度は新型コロナウイルス感染症によって実施できなかったものもあるが、機能強化対象事業も含め、伝統から現代まで、あるいは美術や音楽をも包摂する多彩な舞台芸術のラインナップが策定され実施された。また、現在は舞台芸術学科の卒業生がアーティストや技術スタッフとして多数活躍しているが、本年度の公演事業はそうした卒業生の挑戦の場でもあった（公演事業 No. 2。この事業は2021年度に延期となったが、本年度は出演者の稽古風景やインタビューなどをオンライン配信した）。さらに地域の要望が強い伝統芸能の公演（公演事業 2・5・6）には出演者インタビューや関連レクチャーの記録をセンター機関誌『舞台芸術』24号に掲載した。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>以下のことから、助成に値する意義が継続して認められるといえる。</p>
<p>【学生教育の場として】</p>
<p>本劇場では、学生への教育という観点から、ステージスタッフ、フロントスタッフ講習を実施しているが、本年度も講習を受けた学生が機能強化事業を含む各公演に参加した。また、本年度は一部オンラインでの研修も実施した。また、公演事業 No. 7 では、舞台芸術学科の学生11名が、学科の教員立ち合いのもと、プロのスタッフとともに、舞台・音響・照明スタッフとして制作にかかわり、将来の進路の糧になる貴重な体験をした。</p>
<p>【地域文化の活性化として】</p>
<p>感染症対策のため中止となった公演事業 No. 3 では、『cocoon』の演出家・藤田貴大氏とともに、一般参加型オンライン上ワークショップを開催した。感染症により“人が集う”ことができない現状から、舞台作品や劇場に欠かせない「待ち合わせる」ことをテーマに、その意味や方法について、オンライン上にて作品づくりを行い、その成果を劇場ホームページにて公開発信した。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

公演事業に以下の2つの目標を掲げ、その達成状況について確認した。

【〔受容の場〕の創出と来場者の反応調査の実施】

本年度は、【大学の劇場】である公演事業として、舞台芸術の豊かな「歴史」や「伝統」を実践的に見直し、併せて舞台芸術の「未来」を見据えた新しい作品の創造と発信を行い、「芸術を通じた地域社会への貢献」というミッションのもと、「京都」のみならず全国のアーティストと観客を育てる〔受容の場〕を創出していくことを、1つの目標とした。この目標達成のため、伝統から現代まで、ローカルから海外のアーティストまで、バランスのよいプログラムラインナップを組み、来場者の反応をより詳細に探るため、アンケート回収率の増加を目指した。感染症対策のため、アンケート回収には、これまで実施してきたアンケート用紙ではなく、QRコードを印刷したものを配布し、オンラインでの回収とした。鑑賞後にその場でアンケート回答を行うことに慣れた来場者の方が多かったためか、例年は8.2%ほどだった回収率が、今回のオンライン回収では多くても4%程度という回収率にとどまった。しかし、寄せられた回答には、公演をはじめ、トーク、パンフレットの解説への高い評価が多くみられた。また、徹底した感染症対策に対する評価の声も複数いただいた。また、今回は公演ごとのアンケート回収率の目標を達成できなかったため、年度終了時に劇場友の会会員（有料会員、893人）に対して、劇場運営およびプログラムについてのアンケートを実施した。アンケート用紙は会報とともに郵送し、ファックスまたはオンラインでの回収としたが、会員の12%(106人)から回答を得ることができた。その結果、伝統芸能系公演への関心の高さが再確認された。また、(1)妥当性であげた、①教育や②研究についてのミッションに基づいた公演や研究会についても評価する声が複数あった。この結果についてはセンター内で共有し、さらに改善点を検討し、今後もバランスのとれた良質なプログラムを提供すべく努力することを確認した。なお、このアンケートで要望があった公演の終演時間のSNS告知は2021年度より実施している。

【学生や若年層の社会包摂にむけて】

本学が進める、芸術を通じた学生と社会との連携を強化する「社会包摂」活動の一環として、【大学の劇場】である本劇場では、舞台芸術の魅力や醍醐味を、学生をはじめとする若年層にアピールしている。

本年度は、機能強化支援事業においても、2つの目標を掲げ、以下のような結果を得た。

① 学生ユースチケット購入者の拡充

令和2年度はチケット購入者のうち15%を見込んでいたが、実績は13%にとどまった。

② 本学学園生登録会員数の拡充

令和2年度目標は400名だったが、実績は409名となった。

なお、当初目標に掲げた「外国人来場者数」の調査については、感染症拡大の影響により、本学併設の日本語学校学生や留学生の来日が困難になったため、今年度は実施しなかった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【事業期間について】

本年度も年度を通し特定の時期に偏ることがないように留意して、日程的に無理のないスケジュールを立てていたが、感染症対策のため、残念ながら公演事業 1～4 は実施できなかった。しかし、令和 2 年 9 月の劇場再開以降に開催した公演事業 5～7 については、概ね当初の計画通りの日程・公演回数で実施することができた。また、公演事業 4 については、海外のアーティストの来日が、公演期間だけでなく感染症対策のため隔離期間も含めた長期スケジュールを確保することが求められたため、アーティストが来日できず計画どおりの公演はできなかったが、本劇場や共催者の京都国際舞台芸術祭 Kyoto Experiment の「優れた国外作品・アーティストを京都に紹介するためのプログラム」としての趣旨を生かし、同アーティスト、Dana Michel による映像作品の上映とインタビュー映像を組み合わせた映像上映会を、令和 3 年 2 月 20 日に実施した。この企画は本劇場(春秋座)の大型スクリーンの効果もあって、好評だった。

【事業費等について】

開催した公演事業 5～7 は、概ね当初の計画どおりの事業費で実施した。以下、入場者数、広報、料金について記す。

入場者数 開催した公演事業 5～7 について、感染症対策のため、客席キャパの 50% を上限にしたチケット販売だったため、いずれも目標入場者数の約半分の実績に留まった。

広報関係 公演事業 5 は計画どおり、国立劇場おきなわ芸術監督の嘉数道彦氏が、公演日の約 1 ヶ月前に本学の公開講座「日本芸能史」に登壇され、〈型と創造〉をテーマに、琉球芸能について実演を交えたお話をしていただき、チケット完売につなげることができたが、この際に行われた嘉数氏のインタビュー記事のほか、今回の出演者(歌・三線)で、地元・京都市出身の和田信一氏も、京都新聞に大きく取り上げられた。

料金設定 本劇場では、【大学】の劇場として、本学学生ならびに 25 歳以下のユース層の動員に力をいれており、本学学生および学生ユースは、1500 円～2500 円と一般料金の半額以下の料金設定としているが、本年度もそれを踏襲した。本学学生に対しては、学内掲示物や登録会員むけのメールマガジンなどでよびかけており、公演事業 7 でソロダンスを出演・振付した伊藤キム氏は、かつて本学にて教鞭をとっていたこともあり、来場者の 2 割強が学生ユース層であった。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

下記のとおり、地域の文化拠点の機能を最大限に発揮する優れた事業であったと認められる。

【「大学の劇場」ならではの伝統芸能のアカデミックな視点からのアプローチ】

本格的な歌舞伎劇場である本劇場の春秋座は、歌舞伎をはじめ、能、狂言や琉球芸能、京舞など、伝統芸能系の公演が比較的多いが、(2)有効性でもあげたとおり、本劇場には伝統芸能公演を希望する声が多く寄せられており、その期待に応えることも劇場の使命のひとつと考えている。

令和2年度で12回目を数える毎年の「春秋座—能と狂言」(公演事業6)は、当初から前センター所長だった渡邊守章の企画・監修で開催しているが、平成26年度以降は、当日配布パンフレットに、現所長で能楽研究が専門の天野文雄による能の演目の詞章と現代語訳を掲載しており、本年度は能楽研究の成果をふまえたユニークな上演演目についての解説を掲載し、鑑賞の手引きとした。また、本年度は感染症対策により上演時間を短くするため、毎年おこなっている上演前のプレトークを実施しなかったが、そのかわりとして、能では観世鍬之丞氏(観世流)、狂言では野村万作氏(和泉流)に事前インタビューを行い、その動画を公演1カ月前から劇場動画配信サイトに掲載した。また、その抜粋をパンフレットにも掲載し、作品および出演者をよりよく知っていただく手だてとした。

また、当センター主任研究員で、本学教授の田口章子による公開連続講座「日本芸能史」では、春秋座で行われる主催公演に関連した講師も招聘し、公演紹介につなげる工夫もした。令和2年度は、狂言・茂山忠三郎氏、京舞・井上安寿子氏(公演事業2出演者※令和3年度に延期)、琉球芸能・嘉数道彦氏(公演事業5解説)、能・片山九郎右衛門氏(公演事業6出演者)に登壇いただいた。本講座は本学学生および一般受講生が約400名聴講しており、連続で受講することにより、各芸能の比較を通じて伝統芸能について知識を深め、伝統芸能の魅力を受講生自らが発見できるよう工夫をした。

【安全確保のための取組】

感染症対策 本劇場では、令和2年9月の劇場再開以降、感染症対策のため、学内関係者と公演来場者の導線が交わらないためのゾーニングを、公演開催日に行った。公演関係者に配布する感染症対策マニュアル作成や、検温・消毒作業など、公演のために来場される全員に安心いただくため、徹底した取組を行った。

避難訓練 本劇場のフロントスタッフ、搬出入などをおこなうステージスタッフは、当センター職員が実施する研修を受講しているが、その研修では避難訓練の参加を必須としている。避難訓練は年2回実施しており、毎回約100名の学生が参加しているが、本年度はとりわけ不測の事態にも対応できるよう心掛けた。

【本学ゆかりのアーティストによる継続的公演】

公演事業5は、国立劇場おきなわとの共同主催で隔年開催するもので、琉球芸能と組踊公演は本年度で5回目(国立劇場おきなわ共催公演としては4回目)だったが、本年度はこの5回全てに出演している人間国宝の宮城能鳳氏(立方)・西江喜春氏(地方)を中心に、第一線で活躍する出演者と、国立劇場おきなわと当センター技術スタッフの共同作業により、舞台を立ち上げた。組踊の創始者・玉城朝薫作で、「朝薫五番」と呼ばれる作品のうち、これまで唯一本劇場で上演されていなかった『二童敵討』を上演した。また、琉球舞踊では春秋座で初めて喜歌劇(「戻り駕籠」)も取り上げた。本企画は回を重ねるごとにリピーターも増えており、琉球芸能のバラエティの豊かさを楽しむ公演として、すっかり地域に定着したとみている。公演事業6も12回目を数える春秋座恒例企画で、能・狂言の古典の演目を歌舞伎劇場の空間で、東西の人気・実力を備えた能楽師の皆さんが極めて集中力の高い強度ある濃密な舞台をみせることに定評があり、リピーターが多い。また、公演事業7は本学ゆかりのアーティストによる公演で、学生ユース層の関心が高かった。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

以下のように、地域の文化芸術の発展につながることができたと認められる。

【一般参加者・本学学生との協働作業による作品づくり】

感染症対策のため中止となったマームとジプシー『cocoon』（公演事業3）では、その関連企画として、マームとジプシー演出家の藤田貴大氏によるオンラインのワークショップ「待ち合わせていた風景を記録する」を実施した。当舞台芸術研究センターでは過去2回、藤田氏作・演出で、市民参加型ワークショップ公演を製作・上演しており（平成28年度『A-S』、令和1年度『madogiwa』）、今回のワークショップは、この経験を生かした上での実験的な取組であった。本学学生5名がスタッフとして参加し、企画の立ち上げから藤田氏や劇団および当舞台芸術研究センターの担当プロデューサーと一緒に打合せを重ね、感染症拡大で『cocoon』が公演中止に至った経緯や、この間演出家がどのように演劇と演劇を巡る社会を捉え直しているか、さらには今回のワークショップ開催の意義について、共有がなされた。ワークショップには全国各地から24名のオンライン参加があり、藤田氏の質問で「待ち合わせていた風景」の記憶を引き出し、それらエピソードをもとに、藤田氏がテキストを創作した。学生スタッフはヒアリング作業に立ち合い、参加者のかわりに実際の「待ち合わせていた場所」へ向かい、写真を取り、藤田氏のテキストにそえて、作品として劇場ウェブサイトの特設ページにて公開。作品にあわせて、その創作過程も学生スタッフによるレポートとして特設ページに掲載された。学生の志望にあわせて、制作・広報・写真・舞台美術を担当してもらい、広報担当は特設ページのウェブデザインを、舞台美術担当はこのテキストが上演される場合の舞台美術プランを作成した。今回の企画は、本学をプラットフォームにした、アーティスト＝学生＝一般参加者同士のコミュニティの創造の実現の場であり、参加学生にとっては、プロの演出家の思想を知り、創作過程をともに体験する貴重な機会となった。

【Kyoto Experiment 京都国際舞台芸術祭新プログラムディレクター体制との協力体制】

感染症対策によりアーティストの来日が叶わなかった Kyoto Experiment2020 京都国際舞台芸術祭 Dana Michel 公演（公演事業4）では、令和2年度に新体制となった共同プログラムディレクターのもと、当舞台芸術研究センターも実行委員構成団体のひとつとして他の実行委員団体と協力し、コロナ禍における実現可能なフェスティバルを模索した。本劇場にて上演予定だった Dana Michel 氏の公演は、映像作品＋インタビュー映像の上映に内容を変更し、文化的・性的アイデンティティの形成をテーマとする本アーティストの、作品およびその創作の衝動を観客にむけて紹介する機会とし、また平成22年度より続く地域発のフェスティバルの継続とさらなる発展の契機とした。なお、令和2年度より同芸術祭実行委員長は当センター所長の天野文雄が担っている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

本劇場の活動は、以下のように事業を通じて持続的に発展したと認められる。

【舞台芸術研究センター運営会議の機能について】

本劇場の運営はすべて隔月に催される舞台芸術研究センター運営会議の議を経て行われている。同会議は学内外の主任研究員と劇場スタッフで構成され、次年度の自主事業の決定をはじめ、直近に開催した自主事業の振り返り、アンケート等で指摘される日常的な劇場運営の課題の共有、各会議後2か月間に予定されている自主事業の確認、さらに中長期的な運営方針などについて協議し、独自のPDCAサイクルを構築してきたが、本年度もそのような運営会議によって機能強化支援事業を含む諸事業が推進された。

【本劇場の運営体制について】

本劇場の運営には、経営母体である学校法人瓜生山学園京都芸術大学の教職員、業務委託・臨時職員等のスタッフがあたり、劇場管理とチケット・友の会業務には業務提携した外部の業者があたっている。劇場職員の平均継続年数は、本学職員9.5年（4名）、委託職員7.5年（12名）、臨時職員3.25年（4名）で、定着率も高い。本年度もこのような体制のもと、機能支援事業についても安定的な運営を行うことができた。なお、現在、劇場のより効率的な運営のため、民間および公立の劇場の外部識者をアドバイザーとして招き、設備更新も含め運営全般について助言をうける体制を導入することを検討している。これにより、各公演の内容や収支をより適正なものとしたいと考えている。

【安定的な財源確保について】

本劇場は、学校法人瓜生山学園が所有する劇場であり、安定した経営基盤を有している。また、本劇場を運営する舞台芸術研究センターは、平成25年度より令和6年度まで2期にわたり文部科学省から共同利用・共同研究事業として「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」の認定をうけ、それによって私立学校事業団の経常（研究）経費特別補助金の給付を受けており、安定的な運営財源を確保している。

また、当舞台芸術研究センターは平成29年度～31年度、令和2年度～令和4年度の2期にわたって、日本学術振興会科学研究費「基盤研究（A）」の研究助成の対象となっている。

そのほか、本年度には、劇場友の会会員費、劇場維持管理協力費のほか、外部資金として、文化庁感染症防止対策事業、コンテンツグローバル需要創出促進事業費の補助金交付を受けた。

【学生の参加、ネットワークの構築】

本劇場の運営には、【大学の劇場】として本学舞台芸術学科をはじめとする学生が参画しているが、本年度の機能強化支援事業においても、研修をうけたフロントスタッフ、ステージスタッフ計106名が公演の企画・制作・運営などに関わった。また、本年度も、京都国際舞台芸術祭をはじめとする地域のネットワークや、劇場開設以来培ってきた国内外のネットワークを生かすことができた。